こんなにおもしろいユニバーシティーミュージアム
−その可能性を探る−

大阪大学総合学術博物館　橋爪節也

１．　なぜ大学博物館は開設されたか

末尾【参考資料】を参照

２．　大学博物館と他の博物館

・博物館の使命

① 収集
② 保管（育成を含む）
③ 展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供す
④ 教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行う
⑤ 資料に関する調査研究

・博物館の分類

1. 登録博物館：申請，審査を経て博物館登録原簿に記載　907 館（15%）
2. 博物館相当施設：申請をして教育委員会などから指定　341 館（6%）
3. 博物館類似施設：博物館法によらないが類似した活動　4,527 館（79%）

合計で 5,775 館　　平成 20 年 10 月現在

・世界の大学博物館

・第三の勢力　大学博物館

・大学博物館の連携　　大学博物館等協議会
北大阪ミュージアムネットワーク
かんさい・大学ミュージアム連携

・大阪における大学博物館の可能性

３．　実験としての展覧会

・阪大博物館の場合

・期待すること

【参考資料】

○「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について（報告）」 平成８年１月１８日

学術審議会 学術情報資料分科会 学術資料部会　　（一部要約）

I　学術標本の現状と課題

１　学術標本は，自然史関係の標本や古文書・古美術作品等の文化財に限定されるものではなく，学術研究により収集・生成された「学術研究と高等教育に資する資源」である。したがって，それぞれの研究・教育分野において学術標本となり得る資料は極めて多岐にわたり，その種類・形状・規模も多様である。

２　学術標本は学術研究の進展に伴って収集あるいは生成されているが，学術標本を保存収納する施設設備や整理保管要員の不足等のため，現状では，大学においては研究室の一隅で個々の研究者の責任において保存管理され，ラベル添付等の基礎的な整理が未完了で１次資料にさえなり得ていない状況が多数見受けられる。学術標本は再現不可能な貴重な資料であるにもかかわらず，学術標本の目録化・データベース化に取り組めないでいるケースや，研究者の異動に伴って学術標本が廃棄されるケースも生じている。このような保存管理状態にあるため，研究室の担当者など学術標本の所在と種類を熟知するごく限られた研究者しか当該学術標本を利用することができない。研究室や研究者の努力によって１次資料化された学術標本であっても，保存・活用の体制が整備されていないため，部外者の利用はほとんど不可能な状態にある。研究・教育にとって貴重な資源であるにもかかわらず，学術標本の多くは十分な活用ができない状態に置かれている。欧米と比較するなら悲惨とも言えるほどであり，我が国における研究と教育の活力を著しく阻害している大きな要因でもある。

３　多くの学術研究が学術標本の調査・分析から出発していることから明らかなように，学術標本は学術研究の基礎である。自然人類学の標本として保存されてきた貝塚出土の人骨からＤＮＡを抽出して遺伝学の資料として活用されているように，学術標本はいずれも多面的な学術情報を内包している。ＤＮＡ分析やアイソトープ分析など，新しい分析法や解析法が開発されたことに伴い，特定の研究分野で収集された学術標本であっても，異なる研究分野の研究者によって別の角度から研究・教育の資源として利用されることが増大。

４　国際的評価が確立している欧米の多くの大学は，いずれも豊富な学術標本を収蔵したユニバーシティ・ミュージアム（以下「ミュージアム」という。）を設置しており，それらのミュージアムは研究の場であることはもとより学術情報の発信・受信基地となっている。ミュージアムは「社会に開かれた大学」の窓口として研究成果の展示を行うなど活発に機能。

II　学術標本の保存・活用の在り方

III　ユニバーシティ・ミュージアムの整備

１　ユニバーシティ・ミュージアムの必要性

(1) 我が国は現在急速に，国際化，情報化，高齢化，多様化の社会に向かっており，大学が果たす役割と大学に対する社会の要請もおのずと変わりつつある。

国境を越えた競争原理が働く国際化の中で,我が国の大学は世界に向かって独創的な研究成果をあげ，良質な学術情報の発信基地として機能することが要請されている。

また，環境問題，都市問題のように専門分化した特定の学問分野だけでは対応しがたい多様な問題への対応や，高齢化等急速に変化しつつある社会における人々の高度かつ多様な学習ニーズに対応し得る大学への変革も求められている。（中略）

貴重で多様な学術情報を内包しており,分析法や解析法の発達によってさらに多くの分野に豊富な学術情報を提供してくれる１次資料の活用を図ることができるミュージアムの設置

は極めて有効であり，学術研究の基盤である実証的研究を支援するもの。

１次資料に関する学術情報の発信・受信基地としてこのミュージアムを機能させることは，社会が要請する「開かれた大学」への具体的で有効な対応策である。

(2) ミュージアムを必要とする大学の内在的要因

第一に，複合的な要因によって惹起される今日的な課題に対応するため，自然科学・人文科学等のいずれの分野でも，隣接分野だけでなく異なる分野の学術資料を研究・教育資源として活用する必要性が急速に高まっている。若手の研究者や大学院生は，従来の学問分野の枠にとらわれない研究を志そうとしても，従来の学術標本保存体制ではこれにこたえることが困難である。多様な需要に対応できる研究・教育環境の整備が是非とも必要。

第二に，我が国の実証的な研究・教育は欧米のそれに比べて脆弱と言われる。それは多くの１次資料と接触可能な環境整備が十分に行われていないためで，研究・教育の内容が皮相化しており，豊かな成果をあげることが可能な，また，それから派生する２次，３次の成果をあげるような本質的で独創的な活力に欠けている。状況を改善するための具体的，効果的方策として，学生や研究者に１次資料との接触機会を増大させる場を設置・整備することが必要。

第三に，環境問題の研究や先端的研究に典型的な例が見られるように，現代の学問は総合化と同時にシステム科学への傾向を強めている。このような傾向に柔軟に対応できるのが１次資料であり，その集積と整備は今後の学問の展開にとって極めて重要である。

２　ユニバーシティ・ミュージアムの機能

（略）ミュージアムは単なる学術標本保存施設又は収集した学術標本の展示を主たる目的とする施設ではなく，下記の機能を持つ必要がある。

(1) 収集・整理・保存

(2) 情報提供　収蔵した学術標本を整理し，収蔵品目録を刊行することは当然であるが，さらに広範多様な利用に供するため，画像データベースを構築することが必要である。このことにより，ネットワークを通じて全国的な利用に供することも可能となる。また，研究者や学生のみならず，地域住民等からの学術標本に関する相談に応じ，必要な情報を提供する。

(3) 公開・展示　収蔵した学術標本を研究者に公開し，調査研究に供するとともに，必要に応じて．貸出しや重複標本の交換等も行い，有効な活用を図る。学生に対しては学術標本に直接接する機会を提供し，実証的で充実した教育に資することができる。また，ミュージアムに収蔵する学術標本を用いた研究成果の展示を行い，論文等によらない新しい形式の公表の方法を研究すると同時に，学内の研究成果を公表する場とする。

大学における研究成果については，地域社会に積極的に発信することが求められており，ミュージアムにおいては展示や講演会等を通じ，大学における学術研究の中から生まれた，多くの創造的，革新的な新知見等を地域住民に積極的に公開し，周知することが望ましい。

ミュージアムを「社会に開かれた大学」の具体的対応として円滑に機能させるためには，今後，社会のニーズをも踏まえ，管理運営方法について工夫することも必要。

(4) 研究　(5) 教育

むすびに代えて

（略）ミュージアムや図書館など学内の関連施設をネットワーク化し，大学全体を地域社会に対する知的・文化的情報の発信拠点とすることも今後検討すべき課題と考えられる。